

# 臨床医の頭の中

酒見 英太

洛和会音羽病院副院長・洛和会京都医学教育センター所長

私事となるが、私は医学生時代（1980年頃）より北米での医者につくられかたに興味を持ち、1990-93年に米国カリフォルニア州で家庭医療学のレジデンシーを経るうちに、日本と比べてよく浸透したケアのスタンダードと質の揃った医師を製造する教育システムに感心したが、同時に、疑問が生ずれば病院図書館に行き、当時はCD-ROMのみであったがMEDLINEを検索することを覚えたのは幸運だった。1993年の帰国以来、研修指定病院で一般内科学の診療と教育に携わってきたが、毎日の臨床の場でわからないこと、曖昧なことが浮かび上がるたびに、何がスタンダードなのか、何が正しいのかをできるだけ調べ、患者に適用したり後輩に教える責任の重さを感じてきた。

1990年代に入ってからEBM体系の確立と、ITの発達による医学データベースの利用し易さという追風を受け、誰もがその気になりさえすればEBMを実践できる環境が整ってきた今日、答えを供給してくれる頼れる「先生」として尊敬の眼差しを向けられる快感は捨て難いが、こちらもいずれは年老いていく身、後輩達自らが疑問を放置せずに調べ、信頼できる証拠を見つけ出し、患者管理に役立てる事ができるようにしむけることも私の役目であると考え、前任地の京都医療センターではEBMの実践講座も開催した。

2006年に現在の職場である洛和会音羽病院に移動してからは、若い医師達の間にもEBMの概念も作法もかなり浸透してきており、その教育さえも有能な若手に委ねられるようになったのは今昔の感がある。

さて、臨床医の仕事は、患者の提示する様々な健康問題に適切に対処し、生命予後や機能予後を改善せしめることを目的とするが、患者は疾患名を運んでくるのではなく、症状を訴え、徴候を身体に現してやってくるのであるから、そこからいかに効率よく正しい診断（疾患名）に到達し、その疾患に対し有効性が証明されている治療をいかに迅速に選択し適用することができるかが、臨床医の腕の見せ所となる。

本講演では、内科臨床の診療と教育に従事するものの立場から、臨床医が診断をつけ、治療法を選択してゆくプロセスを紹介し、それぞれの局面で留意しているポイントに言及することで、医学情報サービスにかかわる皆さんのお仕事の参考に資したいと考えている。

## 【演者プロフィール】

昭和57（1982）年京大卒。2006年6月まで国立病院機構京都医療センター（もと国立京都病院）総合内科長および研修部長。2006年7月より洛和会京都医学教育センター所長および臨床研修プログラム責任者。2009年9月より洛和会音羽病院副院長兼任。

1989年より日本内科学会内科専門医。1990年から3年間、米国カリフォルニア州にて家庭医療学のレジデンシーを修め、現在も米国ワシントン州医師免許、米国家庭医療学専門医および老年医学認定医を保持。2003年より京都大学医学部臨床教授。趣味は合唱、寺社巡り、山歩き。